［遺族］　松本　氏（平成 15 年（当時 14 歳）、兄を交通事故で失う）

［要旨］

〇当時の状況

亡くなった兄は３人きょうだいの次男になります。母方の祖母と同居しており、とてもにぎやかな家族でした。

19 年前の平成 15（2003）年、当時高校１年生（16 歳）の兄は、見通しのよい直線道路を自転車で左走行している時に、後ろから走ってきた飲酒運転の車にはねられ、救護されることなく命を落としました。早朝、アルバイトの新聞配達をしている最中でした。

警察から事故の連絡を受けた時、兄の安否は全く知らされないまま、父と母と私の３人で病院に向かいました。そして、思い出すのもつらい対面を果たすことになります。

母はあまりのショックに倒れてしまい、父は事務手続のため私のそばからいなくなってしまい、私一人だけがその場にいる状況になっていました。どうしてよいのか分からない中、助けを求めるような形でおばに連絡をし、兄の友人に連絡をし、自分の友達にも連絡をすることになります。この時点で、外出していた長兄とは、まだ連絡がついていませんでした。

警察の方は両親がいない状況を察して、まだ中学生だった私に、「ひき逃げ事件です」と伝えてきました。同時に、次兄の携帯電話も私が預かることになり、この時点で、私の中ではとても情報過多な状況でした。兄は亡くなり、しかもひき逃げ事件と言われ、両親はそばにいない、長兄とは連絡がつかない、本当におかしな状況になっていました。おばが駆けつけてくれて、やっと学校へ連絡することができました。

その後、長兄が病院に来るのですが、以降、兄に対しての溝ができてしまいました。

〇家族に対する心境、住環境による心境

昨日まで一緒にテレビを見ていた兄が死んでしまったショックと同時に、子供を失い以前の姿がない親を目の当たりにしたショック。親より先に子供が死ぬということは、こういうことなのか。自分を気に掛けてほしいなんて絶対に思ってはいけない。自分が耐えて我慢することで母が救われるなら、その選択をするという気持ちでした。これまで見たことのない悲しみに打ちひしがれる親の姿を見て、自分も心が掻きむしられるような気持ちでした。

当時の住環境は密集した間取りの古い家で、家族が居間に集えるとても大好きな家でした。しかし、兄の遺体を迎えるにあたって、家の仕切りを全部取ってオープンにしたことにより、自分の空間がなくなってしまいました。以降、この住環境は何年も続きます。

兄の友人や知人など毎日訪問者があり、母は、兄にお線香を上げにきてくれることがすごくうれしくて、その度に食事を出し、常に大人数で食事をしていました。北海道の冬は洗濯物を外に干せないのですが、家の中にも洗濯物を干す部屋がないため、思春期の女の子には耐えがたい環境でした。

少し経つと、「母が喜ぶから人が来てくれるのは有難い」「自分の生活が他人に丸見えで恥

ずかしい」「この生活はずっと続くの？」「よい子でいないと」「こんな悩みを持っているなんて誰にも言えない」「自分が元気に生きていることを、母は悲しむかもしれない」と歪んでいくような心境に変わっていきました。ここには、もう以前の母はいないと思っていても、母のことを気に掛けている自分がいます。

父親もつらそうだと思っています。年の離れた長兄に対しては、逃げ道があってうらやましいと思っていました。母と祖母の関係を気にして、祖母には頼りたくないと思っていました。

○学校での生活、性格の変化

学校では、すれ違う度に振り返られ、「線香の臭いがした」と言われる生活が続きました。この時点ですでに人目を気にする性格になっているので、かなりのストレスでした。同時に、友達や先生が気を遣ってくれることに、すごく感謝していた記憶もあります。

一方で、自分の感情のコントロールがすごく難しくなっていました。一番嫌だったのは、交通安全教室への参加です。参加したくない気持ちを伝えると、「お前はそれでいいのか、この先、お前はずっとそうやって逃げていくのか」と言う先生もいました。そう言われると、参加せざるを得ないという思いを抱えながらの学生生活をずっと過ごしていました。

友達に申し訳ないと思ったり、家に常に人がいるため寝不足にもなり、どんどん、「自分の人権は？」「私ってなんなんだろう」という気持ちが強くなっていきました。

私は三兄弟の末っ子ということもあり、主張が強くて自己中心的、目立ちたがり屋という性格だったのですが、事故後は、人の痛みを知って優しくなれた面もあると思いますが、「主張してはいけない」「よい子でいなくてはならない」「人目を気にしてしまう」など、どちらかと言えば目立ちたくない性格に 180 度変わってしまったとすごく感じます。

○その時、欲しかった支援とは

19 年前の私に、どのような支援が欲しかったのか、ずっと考えてみました。この支援が欲しかったという答えは、未だに自分の中にはありません。

ただ、「事故前と状況が変わっているのに、環境が変わらなかった」ことに対する適応への混乱があったことを考えると、もしもその時、環境を変えることができるきっかけやサポートがあったなら、寄り添ってくれる支援者の存在があったなら、一時的にでもその環境から逃げることができたかもしれない、そして違った今があったかもしれない、と今でも考えます。これからもずっと、考えていくのだろうと思います。